

ヴィジュアルリテラシーとナラティブに着目した ミュージアムの言語教育活動の研究

Apprendre des langues au musée : la littératie visuelle et les narratives

今中 舞衣子 (IMANAKA Maiko)

本研究の目的は、ミュージアムにおける教育普及活動の中でも特に言語教育の側面に焦点をあて、ヴィジュアルリテラシーとナラティブの概念に着目してその方法論を明らかにすることである。当初、フランスで先進的な取り組みを行っているミュージアムを対象に、ワークショップの参与観察、関係者へのインタビューを実施する予定であった。しかしコロナ禍により現地への渡航が困難となり予定を変更せざるを得なかったため、文献およびインターネット上のリソースによる基礎研究を行うこととした。

2020年度は主に「声」に着目した研究を行った。ここでいう「声」は人が物理的に音として発する「声」だけではなく、文字として記録される「声」や、絵、写真、モノ、映像などの形で残される概念的な「声」も含む。そうしたさまざまな「声」が展示されアーカイヴされる場としてのミュージアムの機能について考察するとともに、「声」に関するさまざまな作品やプロジェクトを、「他者の『声』を内包する展示作品」「『声』が集まる場のデザイン」「デジタルメディアによる『声』の展示とアーカイヴ」の3つの観点から分析した。

本研究の結果、ミュージアムの展示空間においては従来時系列に基づいた線形的なストーリーを一方向的に提示するという方法が主流であったが、近年では他者の「声」を集めた「アーカイヴとしてのミュージアム」という概念がミュージアムの持つ従来の秩序に影響を及ぼしていることが分かった。また、デジタルメディアの普及により、アーティストやミュージアムによる「声」の収集とアーカイヴという活動は、よりオープンなものとなりつつある。今後、訪問者相互の対話がうみだされるような活動の場、鑑賞者自身の声が作品の一部となるようなオープンアーカイヴ型のミュージアムの機能が、ますます重要視されるようになるだろう。

今後の展望として、こうしたミュージアムの新しい機能を、ミュージアムという場を活用して実施される言語教育活動に生かすための具体的な方法論を現地調査によって明らかにしていきたい。

【研究発表】

今中舞衣子「ミュージアムにおける『声』の展示とアーカイヴ」第4回声のつながり研究会（声の主体による文化・社会構築研究会）、オンライン開催、2021年9月1日。